

福沢諭吉著、齋藤孝訳「現代語訳 ^{げんだいごやく} 文明論之概略 ^{ぶんめいろんのがいりやく}」ちくま文庫、筑摩書房、2013 年 2 月 10 日刊を読む

まず、議論の基準を定めよー「議論の本位」とは何かー

1. 「重い・軽い」「長い・短い」「善い・悪い」という言葉はすべてそれを比較する考えから出てきたものである。「軽い」ということがなければ「重い」ということはない。善がなければ悪もない。だから「軽い」ということは、重いということと比べて軽いのであり、善というの悪と比べて善いということなのであって、あれとこれとを比較しなければ、軽重善悪は論じることができないのである。このように比較した上で、より重要でより善いと決まったものを「議論の本位」と名付ける。
2. ことわざにも「背に腹はかえられない」といい「小の虫を殺して大の虫を助ける」という。人の身体について論じる場合は、腹は背中よりも大切なものだから、背中に傷を受けることがあっても腹を無傷で守らなければいけない。また、動物を扱うのに、鶴はどじょうよりも大きく尊い生き物だから、鶴のエサにどじょうをつかっても差し支えない、ということである。
3. たとえば、江戸時代では大名や武士が何も仕事をせずに生活できていたのを、制度をあらためていまの明治時代のようにしたのは、ただ財産を持っている人たちの境遇をひっくりかえして、財産なしの苦境に落としたようにも見える。しかし、日本とそれぞれの藩を比較してみれば、日本は重く諸藩は軽いのである。藩を廃したというのも、背に腹はかえられなかったからだし、大名や武士の収入を奪ったのも、どじょうを殺して鶴を養うようなものだ。
4. 物事を考えるには、すべて枝葉や末のことを払って、大本のところにさかのぼり、それが行きつく先の「本位」を求めなくてはならないのだ。このようにすれば、議論すべきことは次第に少なくなるだろうし、その「本位」についてはますます確実な議論ができるだろう。
5. ニュートンはかつて万有引力の法則を発見したが、世界のあらゆる物体の運動の理論はすべてこれにのっとって議論されることになった。この法則を、すなわち道理の「本位」と言ってもいいだろう。もし、運動について論じるときにこの法則がなかったならば、議論はいつまでもまとまることもなかっただろう。船の運動については船の運動の理論、車の運動については車の運動の理論が立てられ、理解すべき事柄ばかり多くなって、それを統一する大本の理論はなく、そうすれば、それらの理論が確実性を得ることもなかったにちがいない。

6. 議論の本位が定まらなければ、その利害や得失について論じることもしかない。城郭は守る側にとっては「利」だが、攻める側にとっては「害」だ。敵の「得」は味方の「失」である。かつて便利だったものは、将来の不便になる。したがって、利害得失を論じるためには、まず「何にとって」なのかを決めなくてはならない。守る者のためか、攻める者のためか。敵のためか、味方のためか。いずれにしてもそれが目指すところの本^{もと}を定めなくてはならないのだ。

むかしもいまも、世論にはさまざまな見解があってそれらが互いにかみ合わないのも、基本にかえてみれば、そもそも最初の立ち位置が違うのに、無理矢理に結論だけを同じにしようとしているからである。

P20 ~ 22

[コメント]

難解極まり、近寄り難いと言われた福沢先生の名著「文明論の概略」の齋藤孝先生による現代語訳が刊行されたとは、本当に有難い。日本の文明、これからの日本について少しでも関心のある方は、是非御一読を。明治の偉人は、ここまで日本の将来を考えていたことがよくわかる。

— 2013年2月28日 林 明夫記 —